

◆ 巻 頭 言 ◆

3つの国際会議に出席して

日本ナレッジ・マネジメント学会 理事 石川 昭
(青山学院大学大学院名誉教授)



今年の8月から9月にかけては、ドイツのバーデン・バーデンと名古屋で、2つの国際会議と1つの年次大会に招待され、リスクアナリシスやリスクマネジメント部会の議長や、2つの基調講演を行う機会に恵まれた。

前者は、8月4日から9日に開催された、The 26th International Conference on Systems Research, Informatics and Cybernetics と The 33rd Annual Meeting of the International Institute for Advanced Studies in Systems Research and Cybernetics であり、後者は、名古屋の愛知大学で開催された The 22nd Annual Conference on Pacific Basin Finance, Economics, Accounting, and Management (PBFEM25)で、本国際会議のもう一人の基調講演者は、アベノミックスを強力に支えてきたエール大学/東京大学の浜田宏一名誉教授であった。

同名誉教授は、アベノミックスの三本の矢について解説され、デフレーション・ギャップが1.5%まで縮小されてきたことや、消費税の引き上げよりも、少なくとも英国が実施してきた以上の法人税の減税が急務であることを強調された。

私は、基調講演の題目として、ドイツでは、Amenas Hostage Crisis {アルジェリアで発生したイスラム系武装集団による天然ガス精製プラント占拠とそれに伴う人質事件}を取り上げ、800人が国境を越えたテロリストの人質になり、外国人の人質を含め、37人が犠牲となり、この中で、最大犠牲者は、日本人が10人に及び、英国人5人、アメリカ人3人と比べても格段に高かったことを報告し、平和を愛してやまない日本の危機管理の甘さを紹介し、対策強化を訴えた。

一方、名古屋の基調講演では、主催者の要望に答え、日本語でも英語でも出版している *An Introduction to Knowledge Information Strategy-From Business Intelligence to Knowledge Sciences*(2013年版)の概要を紹介しながら、リーマンショックやサブプライムショックに見られた、経済破綻の歴史や予測に対する学習力の決定的不足、Business Intelligence と Crisis Management や Knowledge Management との関係、さらには、Organizational Intelligence としての Business Intelligence などについて言及し、参加者から多くの質問を受けた。

国際会議の開催場所が、前者については、ドイツやチェコなどヨーロッパ中心であるのに対して、後者は、22回目が日本で開催された最初の国際会議であり、21回までは、米国、香港、台湾、シンガポール、タイ、オーストラリア、ベトナム、中国で開催されており、一度として日本で開催されたことはなかった。

国際会議や年次大会も、回数を重ねると、ヒューマンネットワークは、重層的に広がり、特に論文の査読を前提とする国際会議では、査読者も含め、そのネットワークは絆の深いグローバルなものへと展開する。すぐ参加者は、数の増加と共に国際会議の企画・運営の巧拙によっては、100カ国以上に達してしまうのである。

現に、今年のバーデン・バーデンにおける市庁舎での歓迎会の折、同市側から、今まで130カ国以上からの会議参加者があったという報告を受けて、長年、**Conference Organizing and Program Committee** メンバーで、**International Institute for Advanced Studies in Systems Research and Cybernetics** の役員を勤めてきた者として、感無量であった。

尚、今年もすでに、同市には日本からの公式訪問者が3000人以上に達しているという副市長からの報告もあった。

ドイツには、バーデンという都市も存在するが、「バーデン」という言葉は、「入浴(する)」を意味しているように、古くからヨーロッパ貴族の温泉保養地として知られてきただけに競馬場があり、黒い森の北側に位置するこの人口54,000人強の都市は、世界に沢山の姉妹都市があり、日本の福島市もそのひとつである。温泉は、塩分とラドンを豊富に含んでおり、古代ローマの温泉気分を味わえる施設もある。

19世紀以降、交通網の発達と共に、著名人もこの地で保養することが増え、音楽家のヨハネス・ブラームス、クララ・シューマン、さらにはヨハン・シュトラウスがよく知られており、指揮者のヴィルヘルム・フルトヴェングラーや細菌学のロベルト・コッホなどがこの地で没している。

8月上旬におけるドイツでの国際会議に参加後、イタリア、スイスを経て、帰路の途中、8月22日から26日までは、コルシカ島の南に位置するシチリア島に次ぐヨーロッパ第2の島、サルデニア島を訪問した。ローマ空港やミラノ空港から約1時間半の距離にある。

驚いたことに、第1に、イタリア・サルデニア州首都のカリアリは、素晴らしい港を持つ反面、厳しい坂の都であったこと、第2に、メインストリートのローマ通りでは、ヨーロッパ最古の大学を持つボローニャを思わせるポルティコ(柱廊)が長く続き、人々が優雅にコーヒーなどを楽しんでいたこと、第3に、郊外の海岸線は8キロにもおよび、数え切れないほどのパラソルが規則正しく海岸線に平行にならび、人々が地中海を楽しんでいたこと、そして第4に、家内が深夜、不調を訴えて総合病院で緊急治療を受けたが、英語を完全に話せる看護婦がついて的確に対処して頂き、入院が避けられたことであった。

サルデニアは、今回が初めての訪問であったが、北にはナポレオンの生誕地であるコルシカ島、南西には、異文化地帯のモロッコやカルタゴ遺跡で有名なチュニジアなど、文化の狭間で鍛え抜かれた地域であることを痛感させられた。

以上、簡単に、編集部の要望に答え、傘寿到達後の本年夏の出張活動やドイツのバーデン・バーデン、イタリアのサルデニア島の首都カリアリについて若干紹介させて頂いた。

尚、本年1月上旬、ハワイ島で開催された、**The 47th International Conference on System Sciences** では、すべてではないが、第1回から参加しているただ一人の参加者として、晩餐会の席上、表彰されたことを付言させて頂く。(9月12日記)